

言語技術教育教員研修の参加報告

Report on a language arts training course for teachers

三上 純子
Mikami, Junko

Abstract

In May and September 2009, I participated in a language arts training course for teachers run by the Tsukuba Language Arts Institute. In this paper, I report on the main features of this training course and present my views as a participant in the course.

1. はじめに

言語技術とは、観察に基づき分析的に情報を処理したり、具体的な根拠を示しつつ意見を述べたり、対話の相手や読者にわかりやすいやり方で説明したりするためのスキルのことである。欧米諸国の国語教育では、個々のスキルを積み上げて段階的にクリティカル・リーディング（テキストの分析と解釈・批判）のできる言語力の養成を目指した教育が行われている。

1990年代から日本語による言語技術教育の必要性を説き、独自のカリキュラムでこの教育を実践しておられるのが、つくば言語技術教育研究所所長の三森ゆりか氏である。外国語教育研究センターでは、2008年2月17日に三森氏を招き、「世界に通じる言葉の教育 論理性・分析力と情緒を育てる言語技術教育」と題した講演会を開催した。その後、本センターの大藪加奈教授がFD企画部から派遣されて同研究所の教員研修「基礎1」、「基礎2」に参加し、2008年11月25日のセンター研究会において研修内容の紹介があった。

私は2008年7月に「基礎1」を受講し、2009年5月2日と9月20～23日にFD企画部の経費支援を受けて「基礎2」の研修を終えた。自ら体験してみて、教員自身の言語運用能力を高めるためにも、学生の日本語によるコミュニケーション能力や外国語の基礎学力の養成のためにも、有効な方法であるという印象を強く持った。そこで本稿では、この教員研修「基礎2」の主な内容を紹介し、参加者として考えたことを報告したい。

2. 教員研修プログラムの概略

つくば言語技術教育研究所の言語技術教育教員研修は「基礎1」、「基礎2」、「中級（複数のコースあり）」、「読書へのアニメーション・ワークショップ」からなり、「中級」と「読書へのアニメーション・ワークショップ」を受講するためには「基礎1」、「基礎2」を順番に受講していなければならない。（詳しくは、つくば言語技術教育研究所のホームペ

ージを参照)。各研修の定員は20人で、私が参加した時には、小学校教員、中学校・高校教員（国語・英語・社会・数学・体育）を中心として、スポーツ指導者、医療従事者、大学教員などが研修メンバーであった。

「基礎1」（6時間）では、言語技術教育とは何かという概要説明に続いて、対話と議論・作文と物語・説明・絵の分析・テキストの分析に必要なスキルの紹介がワークショップ形式で行われた。「基礎2」（5日間、30時間）は「基礎1」で体験したスキルの学習活動を、より詳細に実践しつつ、指導方法も含めて同じくワークショップ形式で学ぶものであった。「基礎1」のテーマが5日間に割り振られたプログラムとなる。

これらの研修に特徴的なのは対話形式で行われる点である。研修参加者は絶えず三森氏の問いかけに答え、積極的に授業に参加するよう求められる。評価については「基礎1」では個人評価は行われませんが、「基礎2」では授業への参加のほかに、授業中に書いて提出した課題と宿題が添削され、A+からCまでの7段階による評価を受けた。この評価は絶対評価と相対評価を合わせて行うとのことであった。修了証書を得るためには一定の成績を収めなければならない。

3. 主要な学習活動の紹介

三森氏のスキル学習の方法については、『外国語を身につけるための日本語レッスン』（三森ゆりか著、白水社、2003）と『外国語で発想するための日本語レッスン』（三森ゆりか著、白水社、2006）によりかなり詳しく知ることができるので、興味のある方には一読をお勧めしたい。ここでは、上記の五つの学習活動のポイントを説明する。

なお先に述べたように、この研修はワークショップ形式であり、それぞれのスキルの学習は大まかに、講義→グループディスカッション→全体でのディスカッション→それを踏まえての制限時間（20分、30分程度）内での課題提出（宿題になる場合もある）という流れで進んだ。宿題も含め課題については後でフィードバックがあった。

1) 対話と議論

・「問答トレーニング」

指導者が「あなたはサッカーが好きですか」のような好き嫌いや「土曜日に学校がないことに賛成ですか、反対ですか」のような賛否を尋ねる質問などを行い、生徒がそれに対して答える練習である。指導上特に重要なのは、必ず結論→根拠→まとめの順序で答えさせる、質問者は5W1Hを手がかりにして答えの内容を掘り下げてゆく、特に生徒が当たり前と思込んでいることを言語化させるよう問いかけるなどである。「問答ゲーム」の答を書くのも意見文の基礎的技術を身につける上で有効とのことであった。研修参加者は最初

にこのトレーニングをペアワークで行い、研修中に教室で発言する際には常に結論→根拠という意見の述べ方をするように指導される。

2) 作文と物語

・再話

短い物語のテキストを聴き、その全体を短時間（20分程度）に自分の言葉で書く訓練である。研修時には1200字～2000字見当の物語で練習した。教育的な効果は、聴く力の向上、因果関係や物語の構造の理解力の向上、記述力の向上などである。この方法によれば、作文の題材を考えつのが難しいタイプの生徒もすぐに書き始めることができる。またこの練習を通じて、生徒は原稿用紙の使い方や文意の理解を可能にする主語の適切な入れ方を学べる。他方、教師にとってのこの方法の長所は、一斉指導、添削、比較や評価が容易であるという点である。三森氏は、記述力を養成するためには大学生対象でも再話から入り物語の構造を理解させることが不可欠であるとの意見であった。

・再話の要約

再話で使用した物語のキーワードに下線を引き、因果関係を読み取る訓練である。全体でキーワードを選択後、400字、200字、100字に要約する練習（30分）を行った。ワークシートを用い物語の対立構造に着目した要約法も学んだ。

・物語

台詞のないコマ漫画を使って物語を作る練習で、因果関係や5W1Hを意識し物語の構造を使って書けるようになるのが目的である。生徒がお互いの作品を読みくらべるのも、学習上有効であるとのことであった。

・視点

これも台詞のない四コマ漫画を見て、それぞれの登場人物の視点から物語を書く練習である。たとえば捨て猫を題材とした漫画について、捨て猫を見つけた女の子の視点と捨て猫の視点の書き分けの練習（30分）をしたり、『赤ずきん』の物語の視点分析などを行った。ここでも指導上の注意として、視点による見え方の違いの分析結果を必ず書かせることが大切との指摘があった。

3) 情報伝達

・描写と説明

国旗、時計、人物の服装などの説明の仕方を考えることを通じて、説明は全体から部分へと進める、項目立てをして情報を整理する、描写する時は主観と客観を区別するなどの原則を身につける訓練である。また、間取りの説明（空間的順序）、絵はがきの説明（構

図の重要性)、道案内(相手の立場に立った説明)など多様な対象を扱う中で、対象や目的に応じた効果的な説明方法を習得できるよう配慮されたプログラムであった。

・ 説明的文章の基本構造

パラグラフ(トピック・センテンス/サポーティング・センテンス/コンクリューディング・センテンス)の構造を学び、携帯電話の説明や図書館の紹介をパラグラフで書く練習をした。やや長い文章については、内容をワークシートの形で与えられたので、構造に焦点を絞った学習が効率的にできた。なお説明的文章のもう一つの書き方は物語構成であり、パラグラフ構成が簡潔な説明を目的としたものであるのに対し、物語構成は相手の共感を喚起し、説得することを目的とするとの指摘があった。

・ 説明的文章の基本構造

記録文の例として、議事録の書き方を練習した。経過の議事録は時系列で発言内容を記録し、結果の議事録は内容のまとめりごとに項目を立ててまとめる。生徒には主観を交えず事実を記録するよう指導する。

4) 分析/解釈/批判

・ 絵の分析

絵を見て、何が描かれているのかを読み取る訓練である。大切なのは観察に基づいた分析を論理的に関連付けながら絵の深いテーマを探り出すことである。言語技術教育の欧米における目標はクリティカル・リーディングであるが、三森氏によれば、いきなり文章で行うよりも、絵の分析から入る方が分析の技術を学びやすいという。絵本の絵やゴッホの「星月夜」、ミレーの「落ち穂拾い」等を共同で分析し、そのうちの一つを800字の小論文にまとめる練習をした。

指導の際には以下の点が重要である。教室では、全体から部分へという原則に則り、最初は板書等で設定(場所、季節、時間など)や人物(性別・年齢・職業など)のような分析指標を提示して分析させるとよい。指導者は5W1Hを使い、問答ゲームの要領で質問するが、紋切り型の質問にならないよう心がける。論証の過程では、言葉の定義を調べ常識を再確認する作業も役立つ。指導者は、絵によって、絵のどこ、何を分析させると理解が深まるのかを考えた上で、分析の作業をさせる必要がある。

5) 分析/解釈/批判

・ テクストの分析

絵の分析と同じ手法で、文章に書かれた情報を論理的に分析し、作品に込められた意味を読み取る訓練である。三森氏によれば、文学作品はクリティカル・リーディングをすれ

ば論理的な思考力を育てるのに向いた教材でありうる。グループディスカッションと全体ディスカッションにより、『赤ずきん』、『灰色の畑と緑の畑』、絵本『手の中のすずめ』、『モモ』等の作品分析を行った。絵の場合と同様、何を分析すれば作品の理解が深まるかは作品によって異なる。個別の分析指標を提示したワークシートを助けに、物語の構造、視点や象徴性などに着目しディスカッションを行った。この作業は最終日だったので、小論文にまとめるには至らなかった。

以上、5日間の研修の主な内容とおのおのの学習活動を指導する場合の留意点を簡略に示した。

4. 研修を終えて

ここでは参考までに、私にとっての研修の意義を述べ、大学における言語技術教育の可能性について考えてみたい。

研修に参加することの意義については、第一にワークショップ形式の研修により生徒の立場を体験できる点を挙げたい。発信型授業で問いかけを受ける生徒の気持ちを味わえる上、発言の際に、結論→根拠という問答トレーニング式の発言スタイルを要請されるため、わかりやすい話し方の訓練もできた。また、生徒の立場に立って指導者の指導方法を観察できる意味は大きい。

次にプログラムの特長についてもよく解った。「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能のトレーニングが螺旋状に、言語技術の理解を進めるようなやり方で組み合わせられていることも、研修を通じて実感できた。たとえば、情報における主観と客観の区別は、問答トレーニング、説明の仕方、絵の分析、テキストの分析など、様々な種類の練習の中にあられる。その結果、生徒は次第に原則を活用できるようになるのである。

またスキルの学び方に関する、三森氏のいくつかの指摘には頷けるものがあった。グループディスカッションや全体でのディスカッションの仕方について、三森氏は「反論すべき時に反論する、後で不満を言うのはルール違反、反論を言うことにより自分の意見も検討できる、また否定を受けとめる態度も必要である」と注意された。日本人は対立を避けて、納得していなくても面と向かって反論しない場合が多い。しかし、皆で議論している時に意見を言わないと、グループで仕事をする際には共同責任による不利益を被る可能性もある。議論の場で反論を控える態度には、対立が感情的に尾を引くのを恐れる気持ちが含まれていると思う。それを克服するためには、ディスカッションに慣れて、ディスカッションを知的なスポーツのような感覚で行えるようになることが大事である。指導者と

しては、反論を述べやすい雰囲気を作ったり、反論を述べた生徒を誉めたりして、積極的な議論を促すとよいだろう。

さらに、三森氏がすべてのステップで強調されたのが「書く」ことの重要性である。筆者も議論しているときには理解したつもりでいたことが、書いてみると身につけていないという経験をした。指導する場合も、「再話」から始めて、ディスカッションの成果を書かせるべきだと思った。一定の量の書く練習を経てはじめて、説明や分析のスキルを習得できるのだと思う。研修中に配布された、言語技術教育を受けている小・中学生の小論文の中には書く訓練を積み重ねた結果、複雑な解釈を明晰に文章化したものがあった。書くために議論を整理する過程で思考力が養われるのであろう。

指導者研修の内容は言語技術カリキュラムの速修コースのようなものであり、この研修を受けたからといって、すぐに指導できるとは限らない。対話型の授業で成果を上げるには指導者が効果的に質問できなければならないし、特に絵の分析とテキストの分析では、指導者の分析力が問われる。私自身はまだ指導できるレベルではないが、自分自身の言語技術力の弱点を知り、指導上の数々の留意点を学べたのはきわめて有意義であった。

それでは、言語技術教育を大学で活かすにはどのようなやり方があるのだろうか。私はフランス語教員として、言語技術教育を外国語教育に活かしたいと考え学び始めたが、最近では、大学入学直後に学生たちに言語技術を集中的に学ばせる期間を設けた方が、外国語を含むあらゆる分野における専門教育を効率よく行えるのではないかと考えている。本来、講義を聴いて要点を理解する力、議論する力、テキストを分析的に読む力、レポートや小論文を書く力は高等教育以前に養成されているべきものである。ところが現実には、これらの能力の不足が目立つ学生が多い。本学の学生は初学者ゼミ等でレポートの書き方や口頭発表の仕方を学ぶようにはなっているが、言語運用能力だけに焦点を絞っているわけではないので練習量が不十分である。私も言語技術の練習を部分的に授業に取り入れてみたこともあるが、系統的にやらなければあまり効果はないと感じた。

三森氏の方法は、クリティカル・リーディングに至る道を細かいスキルに分け、パートごとにトレーニングして行く方法であるため、書くのが苦手な学生でも取り組める。ただし、各ステップで練習し添削してもらう必要があるので、大学でこのプログラムを実施するには、最低1学期15週の授業回数を充てなければならないだろう。しかし、組織的に取り組む気になれば、一定数の指導者を育て、初学者ゼミの中に言語技術のみを扱ういくつかのパイロットクラスを立ち上げることは実現不可能ではあるまい。本学の学生の学力を高めるためには、時間と手間はかかっても言語技術教育のような地道な取り組みが肝要だと思う。2011年度から大学における職業指導が義務化されるようだが、コミュニケーション能力の養成こそが最も基本的な職業教育と言えるのではあるまいか。

最後に、言語技術教育教員研修の概要を紹介した本報告をアドバイスにより締めくくりたい。言語技術教育は初等・中等の教育課程から導入する方が望ましいので、小学校・中学校・高等学校の教員の方々には組織の支援を受けて、ぜひこの教員研修を受けていただきたいと思う。また、理系・文系を問わず若い大学教員の皆さんにもこの研修への積極的な参加を勧めたい。自身が議論や論文作成をする際にも参考になるであろうし、今後の長い教育者としての仕事にも必ずや触発されるものがあると思われるからである。